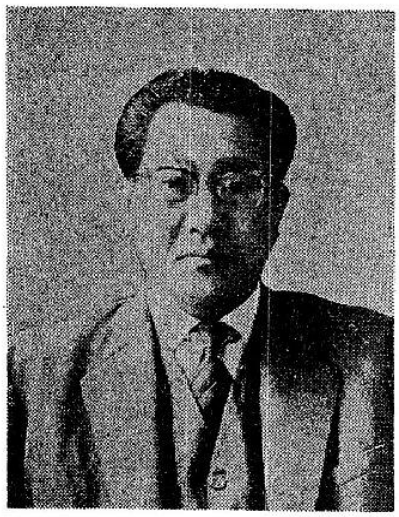
輝かしき十年の足跡

第2回文化祭開かる

今年で旭高校も満10年を迎え、10周年記念の式典が10月6日に華々しく行なわれる。創立当初の思い出話を当時の先生や卒業生の方々に話していただいたり、投稿をお願いしたりした。48番目の高校として誕生して以来、仮校舎時代の苦しかった思い出や、勤評闘争の渦中にあり赤旗に迎えられて登校した日々の思い出等さまざまなものがあるが、設備、内容共に素晴らしい充実ぶりを見せた過去10年を偲んでここに特集号を発刊することになった。

輝かしい伝統の道を行く旭高生を祝福する

学校長　青木一英



学校長　青木一英

清涼錦しゅうの秋を迎えてここに本校創立満十年の喜びを祝い合うことになりました。学校にとっても生徒諸君にとっても大きな喜びであり感激であります。

すでに卒業生を送り出すこと二千数百名に及び、漸く社会の第一線に家庭の主婦の座に有為の材として同窓会員活躍の新しい分布図が描かれつつありますことはまことにご同慶の至りに堪えません。

顧りみますと、本校は今を去る十年前、昭和二十七年に地域の方々の要望により府立第四十八番の高校として呱々の声を挙げ誕生したのであります。始めの一カ年を府立城東工業高校に仮住いし、その授乳期を送り、さらに隣接の高殿小学校、旭陽中学校の一部に移ってその離乳期を過ごし、現在の校舎に名実共に独立の第一歩を刻みましたのが昭和二十八年十月であります。

以来「視野広く奥行き深くしてわが国民としての責務を全うすると共に、わが国の人々のみならず外国の人々からも尊敬と親愛をかち得る人物」を育成する教育方針のもとに前校長綾仁先生、現教頭坂本先生を中心に諸先生方、生徒諸君、PTA、同窓会の各位が草創苦難の道をのり越えて学校づくり、人づくりに粒々辛苦の努力精進を積み重ねられ、善美な校風、輝かしい伝統の路線を敷かれ、不肖、昨年その跡を受けつぎ今日に及んでおります。

現在偉容を誇る堅牢しょう洒な近代建築、色彩管理の特色を生かした校舎はモデルスクールとしての名声を高め、羨望のまととなっております。なおまた最近運動クラブ部室、自転車置場が完成いたしやがて待望の水泳プール及びその浄化装置、生徒急増に備えての新館六教室の増築、それに附随する内部施設としての視聴覚教室の整備等の竣工を見ようとしております。

申し上げるまでもなく教育の本質は精神的営みでありますが「居は気を移す」と申しますようにこれに伴う物的諸条件が教育の成果を大きく左右することも明白であります。それだけに立派な施設という宝が持ちくされということになってはその責務は大きいものがあります。私たちも「ここに教育がある」といえるような教育環境教育内容を作り上げていきたいものとの願い切なるものがあります。

このように立派な教育環境の中で学ぶことができる生徒諸君は極めて恵まれていると言わねばなりません。この上ない強みを持つものであり、大きな誇りを持つものであると言わねばなりません。

従ってこうした恩と恵みに報い期待に応える自覚と責任を以って意欲的な学習活動を展開していただきたいものであります。

さし昇る旭ににおう桜ばなの校章に象徴されているごとく年若い学校の前途は洋々たるものがあります。この将来性、可能性を十二分に高めていきたいものであります。

ここに満十年を一つの区画と考え、過去への回想と反省、将来への展望と設計の契機とし、一人一人の立派な人間形成への努力、立派な校風伝統を更に磨き上げていく精神の誓いを新たにしてまいりたいと存じます。

旭高校新聞

発行所
旭区大宮町4の18
府立旭高等学校新聞部
発行者　辻村明郎
編集者　梶原和彦
電話 (951) 3133～4

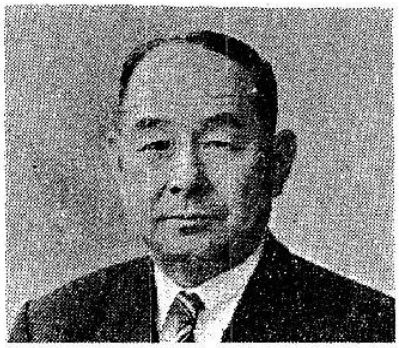
印刷所 宏栄印刷株式会社

TRADE MARK S☆N
プラチナ高級萬年筆
専門技術と専門知識の殿堂
尚美堂
千林商店街　電話(951)五三一六

愛の活動

―民主的な人間形成を願う―

PTA会長　吉岡頼太郎



旭高校創立十周年を迎えるに当りまして、PTAから一言およろこびを申し上げます。

顧みますと、大阪府立第四十八高校として発足して以来、城東工業高校および高殿小学校での仮住いの間も、先生方、生徒さん方とともにPTAは苦難をのりこえて育ってまいりました。当時のPTAの皆様に深く感謝いたします。

さて昨年度には、待望のPTA会報が創刊せられ、明かるいPTA活動へと一段の飛躍を示しました。その第一面をみますと、PTA活動につきまして「親と先生とが手をたずさえて子供の幸福を願う愛の活動」と校長先生が述べておられますが、私も全く同感でございます。秋には父母と先生とが三日間にわたって本校の教育を高めて行くためにはどうすればよいかのテーマで話し合いました。父母といたしましては、全般的に各教科のお話しをうかがい討論することはじめてでありまして、大いに参考になった次第です。

今年に入りますと、広報委員会の方々により取材活動が行なわれみんなで編集をされまして会報第三号ができ上りました。父母と先生が力を合わせて話し合い、見学記をまとめられた点、愛の活動の一環として誠にほほえましい限りと存じます。

ところで最近自転車置場が完成し、プールも順調に工事が進んでおります。私たちの旭高校も十年にしてようやく整いつつありますが、これらの施設、設備が果して府費のみでつくられたのでしょうか。このお答えは皆様ご存じの通りでございます。さらに日々の学習費や研修費など公費では十分でありません。それだからといってPTAで補助させていただくことは筋が違っておりまして、当然公費でまかなわれるものについては大阪府に対して教育費の増額を強く要求し、少しでも父母負担金を少なくすべきであるという声が高まりつつあるとうかがっております。

子供たちが民主的な円満な人間に成長することを願いまして、PTAの皆様とともに努力を続けたい所存でございます。

世界的な人物に

前校長　綾仁信治郎

創立十周年を記念して、いろいろと有意義な行事が催されるとか誠に同慶の外はありません。

学校、PTA、同窓会、生徒会等関係各位に心から、お祝い申し上げます。

旭高校も満十才となり、いよいよ外観内容を充実し、一大飛躍を遂げ、二、五八八名の卒業生がそれぞれ実社会で活躍している姿を想起して、ただうれしい極みです。

創立当初から九年間、微力ながら勤めた私にとって一入感慨無量であります。

過去の数々が胸のビデオテープに投映されます。到底言語で表現し尽せません。またその時期でもありません。私の在職中協力指導懇情を私や学校に寄せられた各位に感謝の誠を捧げる気持で一杯です。

在校生諸君よ！　先輩の築いた後を「まこと」をもって引き継ぎ現校長を初め諸先生の教えを体現し、世界人類の福祉に寄与貢献し得る立派な人物になるよう切望します。

最後に旭高校の前途を祝福しながら筆を置きます。

そして学校の名も旭高校と改められ、当時二百人たらずで出発した人数も、現在では千二百人を越え、その施設もこれに伴なって運動場も整備され、体育館も建設され、プールまで建設中という立派なものとなりました。そして教育施設の充実につれ、年々進学、就職に在校生の方々の努力で、着実に成績をあげられ、旭高校の名を世に広められて、教育内容を高く評価されているのは、同窓生の一人として愉快であり、力強く感じております。

この発展は、初代校長をはじめ現校長と諸先生がたの、教育上の熱愛とその在校生父兄の協力、在校生、卒業生のみなさんがたの努力の総和の賜であると考えられます。

母校の繁栄を期待して

同窓会長　稲本　均

私どもが通学しておりましたころを追憶してみますと、開校して一年ぐらいは、大阪府で四十八番目に創設されたということで、四十八高校という名がつけられており、仮校舎で出発したわけです。小学生と一緒に勉強したり、遊んだり、いづれも懐しい思い出であります。

海あり山あり　本校十周年史を回顧する

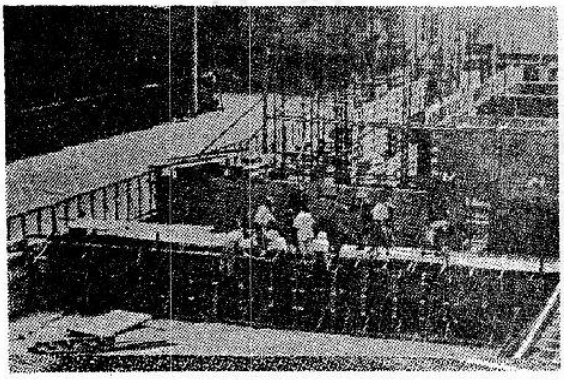
旭高校の歴史は古くはない。しかし、その歴史はたゆまざる努力をし続けてきた数多くの人々の苦難の結晶である。十年という歴史を創った本校もその途は決して生やさしいものではなかった。海あり山ありの連続シーンである。この歴史を、この記念すべき十周年特集号で遠き昔より回顧してみた。

他校舎を借りて開校式

感慨深い城工時代

昭和二十七年三月より着々と準備の進んでいた府立普通高校の設立が、同年四月二十八日に大阪府教育長、知事、府会議長の臨席のもとで、鴻池新田の府立城東工業高校で開校式が行なわれたことによって正式に府立第四十八高等学校として誕生した。これが本校（旭高校）の誕生である。

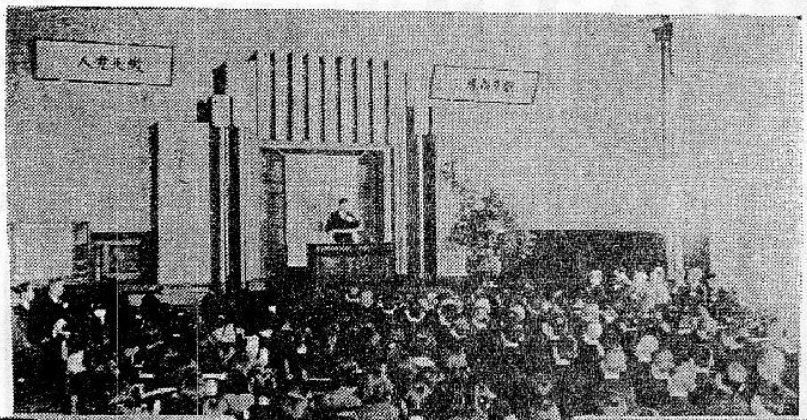
開校当時はまだ校舎がなく、府立城東工業高校（以下城工と呼ぶ）の教室を一部借用して授業が行なわれていた。生徒数は二百名ほどで、教職員は開校時八名であつたせいか、生徒と先生間の親睦は大変深められて、毎日楽しい授業を繰返していた。だが各教科の先生が揃っていなかったので、毎日同じ授業ばかり繰返していたようだった。また夏休みには、さらに親睦を深めるために、天の橋立に臨海指導教室が開かれた。そして同年八月十四日府会において本校校舎建築費用の四千三百七十九万一千円が可決されるやいなや、さっそく学校敷地の選定が行なわれた。本校は本来旭区・都島区・城東区が戦後急激に増えたにもかかわらず、府立高校が一校もないということで、地元民の要望に答えて設立されたもので、その条件にかなう所として、旭区大宮西ノ町三丁目の現在位置、ちょうど旭陽中学校、高殿小学校との中間の位置に選定されたのである。それから第一期工事起工式が二十八年一月十七日に華々しいうちにも壮厳に挙行された。



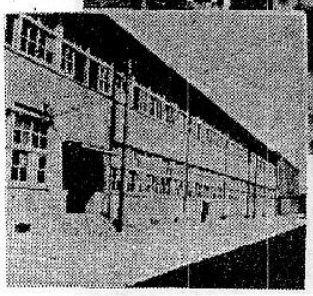
話が前後するが、生徒会結成準備委員会が二十七年五月九日に発足して以来、ずっと地味な調査の結果として同年十一月十四日に生徒会会則が提案され、承認された。会則が承認されるとすぐに二十日、役員立合演説会、二十一日選挙が行なわれた。その結果、初の生徒会会長には飛田泰章君、副会長、書記、会計にはそれぞれ、阿部昌子さん、伊藤信成君、足立晏考君が選出された。もちろん全役員とも一年生である。またクラブ関係では二十七年八月に坂本先生（本校教頭）の指導のもとで設立された野球部が、初戦において対布施高戦に七対三のスコアで圧勝した。この年度に設立されたクラブは陸上競技、柔道、ソフトボール、女子バレーボール、野球、卓球、数学、図書クラブの九クラブである。

さて長かったようで短かかった一年間が城工の借教室の中で夢のように過ぎてしまった。この思い出深い城工に別れをつげて旭区大宮西之町にある高殿小学校に本校の事務室を移転したのは昭和二十八年三月二十五日であった。移転には大した荷物もなかったので、元気な生徒が何から何までトラックに積んで高殿小まで運んだので簡単にすんでしまった。そしてこの日から約半年間、高殿小学校と旭陽中学校の教室を借用する居そうろう授業が始まるのである。この間、旭陽中と高殿小へ授業に出かける先生、終えて帰る先生が行ったりきたりして大変な苦労がなされていた。

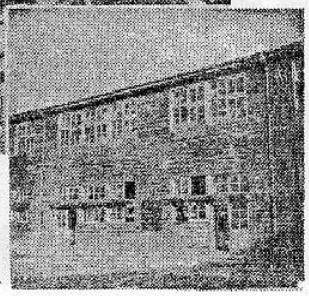
同年四月一日、府立第四十八高等学校が現在の校名である府立旭高等学校に改称された。なぜ旭高校に改称されたかという点で当時



（本校創立当時の城工）→



（高殿小時代の借授業）→



（本校開校記念日　城工講堂を借りて）

校名〝旭〟高校と改称
28年南館校舎竣工する

校長であった綾仁信治郎氏（現在大阪府教育委員会に在職）は旭窓第一号において次のようなことを述べておられるが、このことで大体の見当はつくと思う。

「前略――我が国の醇風良俗を基として欧米民主主義の長所を採り入れ、個人を尊重すると共に社会共同の精神を養い、その個性を磨いて文化を高め国家社会に貢献し、我が国の人々のみならず、外国の人々からも、尊敬と親愛をかち得る優秀なる人物となっていただきたいのであります。朝日ににおう桜花を校章として制定したのもこの意味を象徴したものであります。（原文のまま）」

同年九月十五日、待望の南館がついに竣工した。この工事が完成した時、一期、二期合わせて五百五十名全生徒の一番うれしかった時ではなかろうか。今までの苦しい間借り授業より開放され、自分達の教室を、自分達のホームグランドを持ったということは当時の生徒にとって大変感慨深いものであったに違いない。またこの南館の各教室は全国でも初の試みとされている色彩管理がほどこされている。色彩管理とは、色彩の変化によって仕事の能率を高めることである。

（寒風の中を走るマラソン大会）

「われわれは今心をはずまして高殿の仮校舎より移転を終りました。近代建築の粋をこらした新校舎！　白い薄緑をとかした外装に薄黄の窓枠と黄色のサッシュを配した気品のある美しさ、校舎内部の明るさ、快さ、全く目のさめるような新鮮味を感じます。（旭窓第二号〝新校舎成る〟より）」

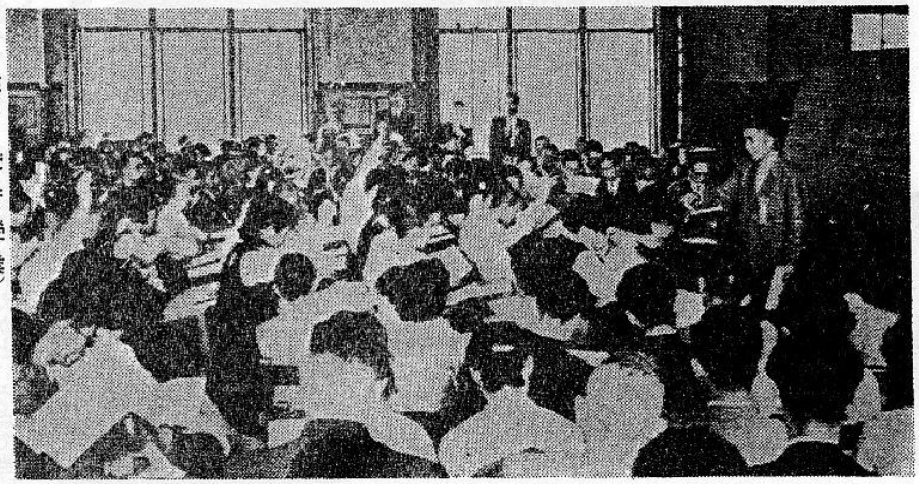
この言葉の中にどれほど生徒、先生達の喜びが隠されていることであろう。そして新校舎に移転してからの生徒、先生の授業、活動には新しい活気と熱と意気が満ち溢れていた。それを象徴するように生徒会クラブに新たにバスケットボール、生物、英語クラブが発足し、他校にも自分達にも旭高校の名を深くきざみつけていった。また本年度に第二期工事（本館）が着工されて新たな感慨を生徒間に与えた。この頃は先生、生徒一丸となって旭高校の発展、自校の発展に全力をそそいでいる姿がみられた。

昭和二十九年四月八日、第三期生三百五十名の生徒が希望に満ち溢れて本校に入学してきた。そしてこれ等の生徒は生徒会にクラブ活動に多彩な才能を発揮して活躍した。六月五日、本年度第一回生徒会が開かれた。議題は長髪の件である。すでに一期生、二期生の間でも問題になっていた長髪がこうして公の場にとりあげられて、生徒相互間でも賛否いろいろと論議がつくされたが、結果は先生方の意向が強く、以前どおり禁止された。

同年九月十三日、中心気圧九六〇ミリバール、最大風速三十四メートルの台風による臨時休校が十三日、十四日の両日にわたって行なわれた。また十八日には台風十四号が近畿地方に上陸の恐れがあると報道されたので、授業が休業になった。これまた本校初の非常処置であった。この十四号台風は静岡県に上陸したために被害は出なかった。

さらに十月に入って待望の本館が竣工した。教室は南館と同じく色彩管理がほどこされた。またこのとき現在あるような立派な図書館の基となった図書館が開館した。当時書籍数は少なかった。数えてみれば本校第一期生が入学して早や三年の月日が流れた。そこで学校は二年生の進学にそなえて進学講話が、市大の北村教授を迎えて十一月九日階段教室で行なわれた。本校初の卒業生となるためか、生徒は熱心に北村教授の話に聴き入っていた。また毎年行なわれている遠足が、春、秋と行なわれ、秋には三年箕面、二年明石、一年嵐山方面へと楽しく秋の一日を過した。

昭和三十年二月二十三日、第一期生卒業生のための送別式が運動場において開催され、翌二十四日には百七十四名の生徒が実社会へあるいは、大学へと巣立って行った。これ等巣立ち行く卒業生の感想を旭窓より求めてみた。


（借り校舎授業）

「自分は鴻池新田の姉の家へ行く時、いつも電車の窓から、目を城東高校へ注ぐ、城東工業高校の校舎の一部を見る。そして赤い屋根ガワラの便所を認めるたびに〝ああ、まだ有った〟と妙に一種の安心感が宿るのである。あの〝鴻池時代〟がなつかしく思い出され

なつかしの鴻池時代

校歌作成の努力実らず

一期生の卒業

光の曲

る。それも昨日のようである。」

「現在こうして美しい校舎で学んでいながら楽しい思い出を求める心は、二年前の鴻池時代に飛んで行く。一年の夏休み、初めて布施高校とソフトの試合に行った時顧問の先生はもちろん、校長先生まで応援に来て下さったことは忘れることができません。」（以上原文通り）　これ等をみると、どうも思い出に残ることは借り教室で学んだ鴻池新田時代のことである。

昭和三十年四月八日、第四期生四百名の入学式が行なわれた。また五月八日には日本体操祭に参加した。そして五月三十一日は第二期生の修学旅行は九州方面であった。六月二十日には校内バレーボール大会が開かれるなど本校の授業、学習とも一応完全に軌道に乗ってきた。そして校内全体が一つの目標に向って一心に進み出しはじめた頃、九月十六日、本校校歌選定委員会が発足し、今中楓溪氏に校歌作成を依頼した。そしてこの時作られた校歌の歌詞が次にあげる〝光の曲〟である。

（一）

夢だ、希望だ、瞳が光る
空は青空、世界をつなぐ
若き生命に、生き抜く力
光、光よ、行く手は光る

そうだそうだ、光だ
行く手は光る

以下、二、三、四と歌詞がつづいている。また作曲は高木和夫氏によるものであるが、残念ながら校歌選定委員会で「これは校歌としては難点がある。」として否決され、また全校生徒に問うた結果も多数が不適当であるといってその後は生徒間でときどき口ずさまれる程度であった。

昭和三十一年二月十一日、第四回校内マラソン大会が寒風の中に挙行された。これは開校以来ずっと続けられているものであった。（現在では交通事情のために中止されている。）話が前後するが三十年十一月十五日に本校で英語公開研究授業が、他校より多数の英語関係者を招いて、東京教育大、青木名誉教授の講演が行なわれたのを皮切りに、昭和三十一年六月三日神戸高校へ本校生徒五〇名が橘正観先生（現在武庫川女子大勤務）に連れられて、その講堂において英語公開模範授業が行なわれた。また三十二年には大阪女子学院においてこれまた模範授業が橘正観先生を中心にして、ミシガン大学のフリース教授夫妻を招待して行なわれた。本校英語科開設以来の最大の誇りであり、かつまた本校の名誉でもある。

昭和三十一年十月八日、全校団体映画観賞が梅田劇場において行なわれた。その時の映画は記録映画〝マナスルに立つ〟であった。

三十二年二年十四日にはスリッパ調査委員会というものが結成され、弱いスリッパ、不便なスリッパの改良を学校に要望するために後々まで長く続いて活躍したのである。また三月十一日には第四期生の修学旅行が男女別々に一班、二班と編成されて行なわれた。三期生までは男女合同で行なわれていたが、生徒数も増え、男女同行にも考えなおすべきことがあるという理由で、別々に行なわれることになったのである。

（12クラス出場して自慢の声を競う校内合唱大会）

活発になった生徒会

規則改正で大いに奮闘

昭和三十二年七月六日、初の防火訓練が行なわれた。暑い最中に消防車による実演訓練がひろうされ、少し涼しくなったような顔をして生徒は見学していた。夏休みが明けた九月二十五日に昨年に引き続き狂言観劇が一年生のみ三越劇場において行なわれた。また体育大会が十月十三日に挙行されている。十月三十一日、三年生によって卒業記念アルバム委員会が結成された。そして府会議員など、いわゆる本校建築功労者の方々の写真を載せるか載せないかで学校側と大いに論争した。そして論争した結果、第四期生のアルバムまで二ページにおよんでいた議員の写真が五期生のには一ページとなった。そしてこれは次の六期生の頃になると完全に姿を消してしまうのである。

この頃を境として生徒会活動なるものが急に活発になってくるのである。年が明けて昭和三十三年となると、俄然生徒達は色めきたった。というのは四月七日の代議会で生徒会規約改正委員会が設置されたのである。同委員会は長い期間におよんで検討を加えた結果生徒会規約、七条、八条、九条、十二条、十四条、十六条、十七条二十一条、二十四条、二十七条、三十一条等を改正するのに成功している。改正日付は十二月四日である。また六月二十日に開かれた代議会では校歌作成準備委員会の設置が了承された。この委員会は学校校歌作成準備委員会（同委員会は教職員で構成されている）と協力して、昭和三十四年度四月には本校教職員の手により、歌詞、作曲ともに完成し、生徒にも多くの支持をうけて制定された。歌詞は国語科の明珍昇先生、作曲は音

楽科の片岡通昭、宮越昌子両先生の手によって作成された。

また本年度は問題の多い年で、〝図書館閉館時間の延期〟〝ファイヤーストーム開催について〟〝北館電気装灯の件〟等をかかげて学校側といろいろ話し合って、〝ファイヤーストームの件〟を除いてすべての要望がとりあげられた。この年の特記すべき事項として、米国の高校生が本校を訪問したことである。来校は二人でエアーロン・テスラー君とオウン・マーシャル君である。二人は本校の英語の授業に出席したり、また、柔道部を見学したり、箏曲部の琴の調べに熱心に聴き入ったりして、楽しく見学してゆかれた。またさらに大切なことは三十三年四月三十日に体育館兼講堂が、竣工したことである。

歴史最大の不慮の事故

勤評問題で校内混乱

本校史において最大の歴史に残る事件といえるのは何といってもこの年に起った勤務評定問題ではなかろうか。われわれにとって最も不幸なことは教育の場に政治が入りこんだことであった。

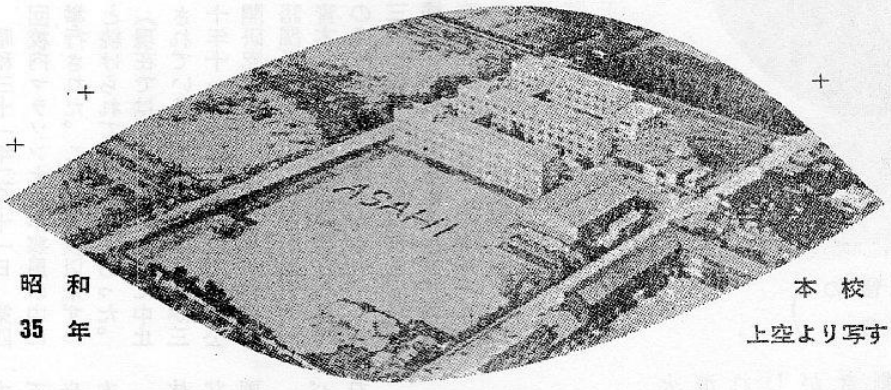
昭和三十四年三月二十日同窓会館並びに食堂が完成し、また八月三十一日には柔道場、音楽教室が完成し、本校の設備はほとんど充実した。その当時の感動を旭窓より求めてみよう。

「昼、食事として食堂を利用する場合、左記の食品中最もよく注文するだろうと思うのは何ですか（生徒食堂委員会希望調査より）」

その結果、カレーライスとのこと。

「昨年一年間を通じて、最大の印象といえば部員なら誰もが感じていることで〝柔道場の完成〟である。我々のクラブが校内におかれて以来ずっと部員の念願とするところだった。（柔道部クラブ報告より）」

昭和三十五年六月二十九日、本校始まって以来の大赤字を出した野球部の進退をかけた生徒総会が開催された。〝赤字を出すとは全くもってけしからん、それ以上にけしからんのは生徒会である。生徒会は何をしておったのか〟という意見から、〝赤字を出してもらって我がクラブのほか他のクラブまで活動ができなくなる、たった九人のクラブのために、我々何百人のクラブが活動できないようになるのは全くつまらない。野球部を数年間活動停止にすべし〟との強硬論から、〝できてしまったものはしかたがない。本校の校名のこともあるから早く支払ってやれ〟との温情名誉論までさまざま出たが、結局翌日の無記名投票の結果、生徒会が責任を負うことに決定してしまった。おかげでこのため他のクラブの活動は低下してしまった。この赤字騒動があったので奮起したのか翌年三十六年度の大会に本校野球部創立以来、初めて三回戦まで出場して花々しく前年の汚点をそそいだ。また三十五年度には世論を動かし、わが国の民主主義を守るためにたたかった安保改訂反対デモがあちこちで行なわれていることで、本校生も大いに活発なる論争を繰返し、個人的にはデモに参加していた生徒もなかにいたということである。その他はこれといったこともなく平穏無事に過ぎ去るかに見えたが、



昭和35年　本校上空より写す

綾仁校長の府教委栄転

突然昭和三十六年三月になって綾仁校長の府教委へ転勤が報ぜられたのである。そして昭和三十六年四月三日付けで綾仁校長は本校を去られた。その後任として当時府立鳳高校校長であった青木一英現校長が赴任してこられた。先生は〝落ちついた環境の中で、じっくりと勉強のできるような雰囲気をつくりたいと思います。だから生徒諸君も意欲を燃して勉強してもらいたいと思います。私も最善をつくしたいと思います〟と旭高校新聞第二十号で発表しておられるように、環境作りに専念された。そしてこの年の十一月十二日には本校初の文化祭が貧相ながらも開催されたのである。これは従来までのクラブ研究発表会というものに少し改良点を加えたものではあるが、文化祭という名のもとに開催されたことに意義があろう。またこの年で、もらすことのできない事項として、後期生徒会役員改選に、本校創立以来初めて、候補者十一名もの多くが四役席を競った。そして結果、二年生の男子ばかり、しかも同級より三名の役員を選出した。当時の旭高新聞第二十一号は次のように報じている。

「後期生徒会役員改選は生徒会創立代来初めてである十一名もの立候補者（内訳、会長二名、以下副会長、書記、会計おのおの三名）が四役席を競って十九日（木）に一時間半におよぶ立合演説会が開かれ……（以下略）」

「前略――しかし、文化祭開催が決定した以上、またその準備をまかされたからにはそれらの障害をのり越えて立派なものにしたいと願っている。（中略）他校の、金のかけた文化祭には豪華さの点ではとうてい太刀打ちできないだろうが、内容の面で質的に充実したものにしたいと思っている。（旭高校新聞第二十一号、文化常任委員長のことばより）」

昭和三十七年四月二十八日、本校が創立して満十周年、早いものである。一昔といわれる歳月が過ぎてしまったのである。そして今は十月六日、花々しく創立十周年記念行事をかねて、ここに第二回文化祭が開かれようとしているのである。長かったようで短かかった十年間、十年前では想像もできなかった白亜の殿堂が我等の母校旭高校の現在の姿である。この十年間をふりかえってみて、何らかの意味でこれから先の進歩への参考になればと筆をおく。（東）

十年勤続 功労者をたたえて 紹介と謝辞

岩尾みどり先生（事務）
岡本増雄先生（事務）
坂本正一先生（教頭）
富永公一先生（生物科）
長瀬静子先生（保健体育科）
森下繁男先生（事務）
山本元一さん（校務員）
（アイウエオ順）

大阪府立第四十八高校として誕生して以来、鴻池新田時代、高殿小学校時代を経て今日まで辛苦を共にしてこられた七名の教職員の方々をここに紹介し、その功労をたたえたいと思います。

"わびしかった城工時代"

岡本増雄

十年前を思い偲んで今日ここに十周年記念を挙行せられることは誠に懐かしい思い出で一ぱいです。仮称第四十八高等学校として創設せられ城東工業高等学校の片隅の木造校舎で生徒数一八〇名位であったと思います。自分達の学舎も運動場もなく、なんとなくわびしい思いで過ごしたように思います。

この間幾多の障害あり、またこの土地に自分達の立派な校舎ができ、校名も旭高等学校と決り、この時のうれしさは格別でありました。

今後はこの立派な旭高校をますますよりよい学校にするために一二〇〇人の生徒と七〇人の教職員が心を一つにして、なごやかにそして、のびのびとした環境をつくり一層よい学校になるよう努力したいものと思います。

新設連続の十年

坂本正一

十年の感想をときかれても『ああもうそんなになったのか』と思うだけで文字通り矢の如しであった。学校十年の歩みは目には新設の連続であった。南館・本館・北館と逐次巨費が投ぜられて今では堂々と威風を輝かせている。旭もここまでよく成長したものだと思う。関係の方々に今更ながら感謝したい気持である。

地盤が弱いので大変だともよく聞かされた。これがもっと高層なら工事はさらに大がかりだったろう。深い基礎――これは私達の学習にも通じよう。

先輩の労苦を想い、満たされなかった数々をしのんでこの十年の基盤の上に大きく雄飛しようではないか。

"楽しかった授業時間"

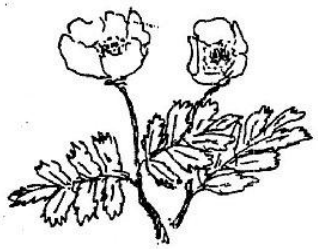
富永公一

「光陰矢の如し」鴻池新田に大阪府立第四十八高校が誕生してからはや十年の年月が過ぎました。当時わずかに十人ばかりの先生方によって教科目が担当され、坂本先生（現職）の物理、橘先生（現在武庫川女子大学）の英語、沢田先生（現在堺市教委）の数学、長瀬先生（現職）及び吉田先生（現在大阪大学）の体育、そして私の生物が、熱心に講義され、生徒諸君も楽しく受講したものでした。生物のプリントを三八〇枚も印刷したのも夢のようで当時のファイトがなつかしい。夏には天ノ橋立の臨海、そしてまた生駒山への徒歩遠足等思い出になっています。本校十周年を迎えるに当ってその当時よりの現職員の一人として過去における教職員および生徒諸君に対し敬意を表する次第です。

最初にできた建物は？

森下繁男

創立十周年記念を迎えることになりましたことを心よりうれしく思っております。「満十年」一口にいえば簡単ですが、現在のような立派な学校になるまでには、大変なことでした。この旭高校が一番最初に建築されたのは何だったかご存じない方がほとんどだと思いますので、この機会に発表します。ご承知の通り第一期生諸君の入学時には城東工業高校の校舎の一部で開校されたのですが、工業高校といえば男子のみでここに女子生徒が登校したのですから大変でした。男子便所はあっても女子便所が皆無です。早速間に合わすため大急ぎで借用校舎の一隅に建築されました。旭高校で最初に建築されたものは女子便所であったのです。



なつかしかった城工時代

長瀬静子

十年ひと昔とか

あの頃私は、毎朝京橋で七時五五分の四条畷行に乗り城工生と一緒に門をくぐっていました。

それから一年、我が府立第四十八高校の建築予定地の隣り、今ではお向いになる高殿小学校へ移転し、毎日力強い未来の学校を想像しながら建築の鎚の音を耳にしたものです。

最初に完成したのが南館、早速新しい教室で心をはずませながら授業の扉を開きました。今の化学教室が教務室、化学準備室が事務室、物理準備室が保健室、三階の生物準備室が図書室、皆さんの生徒会室が校務員室だったのです。

感慨無量の南館設立

山本元一

昭和二十七年四月、本校は大阪府立第四十八高等学校として、鴻池新田にある城東工業高校の一部を借りて設立されました。当時は生徒数一八〇数名で城工の五教室を借り、校長以下職員七名、事務五名、校務員一名で、机も何もない状態から出発し、二年目に位置が現在地に決まったので向いの高殿小学校へお世話になることになりました。

そして昭和二十八年十月に南館ができあがった時はもう感慨無量でした。今ではいろいろ用具を他へ貸してあげるという立場ですが、今から当時をふりかえってみると全く夢のようです。そんなことからもいま私の願いは、「ものをいわない物」いわゆる公共物をもっと大切にしていただきたいことですね。

旭高の発展を祈つて

岩尾みどり

十周年おめでとうございます。十年一昔とは申しながら長いような短いような十年間は夢の間に過ぎてしまいました。この間には沢山の方々が入学しそしてめでたく卒業され、また職員としてお出になった方々も沢山ありましたが、当初からのものは僅かな数となってしまいました。「きてゆきて十年すぐれば両の指に満ちぬ浮世のわびしかりき」。今後益々旭高等学校の発展をお祈りいたします。

明日の為に！本校の為に！熱と意気で立ちあがろう

「光陰矢のごとし」とはよくいったものである。本校も早や満十歳を迎える年となったのである。他校の五〇歳、七〇歳にはまだまだおぼつかないが――本校が二〇歳になれば他校も比例して歳をとるのだから、おぼつかないことにはかわりがない。ここでいうところのおぼつかないとは、伝統や、他校の持つ校風の面でのことである。――随分歳をとったものである。でもこの〝歳をとる〟と言う言葉は私達の母校である旭高校においては、何か祝福めいた言葉となってはねかえってくるのである。というのは、現在の旭高校の姿は十年前までの他校の校舎の一部を拝借して授業していた頃の姿は全く見られず、実に雲泥の差があるのである。

〝本当に立派になったものである〟十年前のことを知っておられる諸先生や先輩諸氏は本校にやって来ますと、必ずこのようなことを口にされます。それほど本校の発展は素晴らしいのであります。こんな短期間で、このように発展した学校は大阪中捜してみても数えるほどしか、いやほんの二、三校あるかなしかである。

「生駒の連山を望み、天に向ってそそり立つ白亜の殿堂」。まさに私達の母校旭高校の名にふさわしいではありませんか。鉄筋三階建の校舎が平行に東西に三むね走っている。それを連絡する渡り廊下、そしてまた府下一美しく、清潔である旭窓会館、モダンな体育クラブの部室、バレーコート、立派なバックネットに運動場、つい最近できあがった自転車置場など、旭高校の発展を充分に、裏付けるに欠かすことのできない事実である。さらに今またプール建設と、新校舎および視聴覚教室の建設を見ても充分にうなづけるものである。〝なんと素敵ではないか〟こんな素晴しい環境に囲まれて学習する私達旭高校生はなんと果報者ではなかろうか。その点、大いに他校に誇っても良い所であるし、また誇ってもしかるべき所である。

だが、ここで重要な問題として起ってくる一つの事実がある。〝なるほど、立派な校舎、設備はととのったことはととのったが、一体その中の質はどうなんだ〟とある人がいった。これほどまで、適確に的を射た言葉はあるまい。ここで私達の質、いうなれば器に対する中味を考えてみる必要があるのではなかろうか。

今年からは、いや今のこの創立記念日を境として私達は、器作りより質作りに励まなければならない。もう完全に完全なる器はできあがったのである。これからは私達の質を良くする時期がやってきたのである。十年にして心気一転新しく生まれ変らなければならないのである。今までの生ぬるい学習態度、方法等に終止符を打って次代へのホープを生むよう努力しなければならない。〝十年にして国の興亡は左右される〟とある歴史に残る大人物がいったように私達はここで、この立派な旭高校を興こすも、亡ぼすも今ひとときの私達在校生の意気にかかっているのである。

〝器のみ立派な旭高校〟〝内外観ともに充実した旭高校〟諸君はどちらを選ぶも自由である。がしかし、今日ある旭高校を作りあげてくださった諸先生方、ならびに先輩諸氏のためにも、またこれから後何十年いや何百年と本校に入学してくる可愛いい後輩のためにも、私達は後者のことば〝内外観も充実した旭高校〟のタイトルを選ばなければならない。来る二十周年記念までには是非ともこの念願を達成したいものである。二十周年にならなくても、十五周年でも良いのであるが、あえて二十周年までと期限を切ったのは、十年毎に本校の発展の段階を見ようとしたためである。

私達、現在この旭高校に在学している全生徒は、この目標に向って大いに奮闘努力する必要がある。そのためには前述のごとく心機一転し熱と若さを持って諸先生方と共に手をとりあって目標達成に努力しようではないか。

〝さあ、明日とはいわず、本日より、この記念すべき十周年記念式典の日より頑張ろうではないか。お互いに手に手をとって…〟

（昭和三十七年度前期生徒会・会長　東　進）

創立10周年に寄せて
遠き昔を語る恩師達

旭高校創立十周年と聞いて「なに！、まだ十年にしかならないのか」と言いたいような気がする。それほど私には旭高校の十年が思い出でぎっしり詰まっているのだ。私は公立学校在職計二十年余の内、最後の六年半を旭でお世話になったのだが、この六年半は他の何れの学校にいた時よりも感激の多い年月であった。私には六年半の思い出なのだが、退職してからも再三お邪魔しているので、敢えて十年の思い出とさせていただいていいような気でいる。

親は先生、子は生徒

旧職員　橘　正観

私は昭和二十七年創立当初より勤め、三十三年十月に退職、直ぐ現在の武庫川女子大に来たが、旭の六年半が片時も忘れられず、丁度嫁が里帰りするような気持で、思い出しては旭家に帰って先生方やその他の人々と談笑するのが、この上もない楽しみになっている。

私の教え児はもうみな卒業してしまったが、今の生徒諸君をみても身の内に思えてならぬ。

なぜ旭がこんなになつかしいのか、話せば自然に創立当時の一年間、あの城東工高での間借り時代にもどってゆく。当時の先生方といえば、綾仁校長先生、坂本教頭先生、数学の沢田先生、社会の原先生、それに英語の私であった。しばらくしてから、今おられる富永先生、長瀬先生、それから木田先生等が来られ、他に非常勤の先生も二、三おられたように憶えている。事務室の岩尾、岡本、森下の三先生、そして校務員の山本さんもはじめからおられた。生徒は一組六十名余の三組で計約一九〇名。職員生徒共にまるで親子兄弟のような親密さで、まとまっていた。それにPTAの方々ともすっかり打ちとけて、それはそれは睦まじい一大家族であった。この一期生というのが、私の今までの教師生活中一番印象の深い教え児なのである。おそらく今後とてもこれ以上印象に残る連中はあるまい。誰が教室のどの辺に坐っていて、どんな恰好をしていたとか、どんな答え方をしたとか、何から何まで頭の中にはっきり残っている。職員室で仕事に余念のない時でも廊下を歩く生徒の足音で、だいたい誰だか容易に見当がついた。その頃の思い出をあれこれ述べてみたら数限りがない。

あの頃、生徒の中で誰か二、三人、毎朝早くから来て教室の掃除をやっていた。学校で決めた放課後の清掃ではなくて、言わば自主的な掃除である。本人らは当り前の気持で「やりたいからやっているのだ」と言わんばかりのようだった。

私は年のせいか、それともいま女子のみの環境にいるせいか、妙にこのような目だたぬやさしい心ばせというのが好きでならぬ。私はいつもこんな気持で旭時代を振り返っては、ひとりでほほえんでいる。

校内には家庭的雰囲気

ひっそりした就任式

旧職員　木田政治

このたび創立十周年を迎えられ校運益々隆昌で、有為なる人材養成のため多大の貢献を致されておりますことは慶賀の至りに存じます。

思えば月日のたつのは誠に速いもので、私が旭高校に奉職しましたのは十年の昔創立の年の十月でした。当時の校舎は草深い田舎、鴻池新田の城東工業高校の西北隅の木造校舎の一角を借りたものでした。私が坂本先生の御紹介で生徒諸君に就任のあいさつをした時は、校舎の北側の狭いあき地に一年生三クラスがひっそりと整列して、素朴なしかし真しなまなざしで私を注視していてくれた印象を、今も忘れることができません。

当初は生徒数は百八十名、先生は綾仁校長ほか八名の小世帯、草創の事とて万事不如意、教室も普通教室が三つあるだけ、教具や設備も至って不備でした。かように形の上ではたいへん貧弱で、教育上いろいろな不便を忍ばねばなりませんでした。その代り生徒と先生との間はいたって親密で先生は生徒の一人一人をよく知り親切に指導され、生徒諸君もほんとうに熱心で、師弟気合いを合わせて立派な学校の基礎造りに真剣でした。中でも校長始め橘、富永、沢田、長瀬などの諸先生はほんとうによく尽してくださったと思います。その上PTAの方々も異常な熱意をもって協力援助せられました。当初は人数が少なかったせいもありますが、校内には家庭的なふんい気が流れ、和の精神が体現されていました。この精神はその後も継承されていると思いますが学校が大きくなるにつれてだんだん薄れていくのではないかと思います。しかしこの和の精神は本校の貴い伝統としていつまでも保持して大きく育てていかれたいものと思います。

なお私の関係した所では、生徒会誌「旭窓」の創刊をしたことです。「旭窓」という名称は当時の生徒諸君にその命名を募集した結果入選したものです。謄写印刷の粗末なものでしたが、綾仁校長が本校教育の精神を鮮明された一文は特筆すべきものでしょう。生徒図書館の母胎もこの時に生れました。当時は教授、学習用の参考書程度のものが二、三百冊ぐらい教員室の片隅に置かれ、先生も生徒も共用していました。それがほぼ図書室の形を整えるようになったのは翌二十八年十月、現在校舎の南館に移ってからです。この図書館の育成には私もいささか微力を尽させていただきました。

思い出は色々尽きませんが、このくらいで筆をとめます。現在では校舎設備も一流で先生方も優秀錬達な方が多くおられることですから、生徒諸君も努力しだいでいかようにも立派になれると思います。一層のご奮励を切に望みます。

過ぎし十年を偲んで語る

座談会

〃10年ひとむかし〃とよくいわれるが、事実10年とは非常に長い年月である。この10年の間に歴史は夢のように過ぎ去っていく。そこで本校も今年で満10才を数えることとなった。

昭和27年3月31日に「大阪府立第48高等学校」として設置された本校も、思えばなつかしい事項でいっぱいであろう。

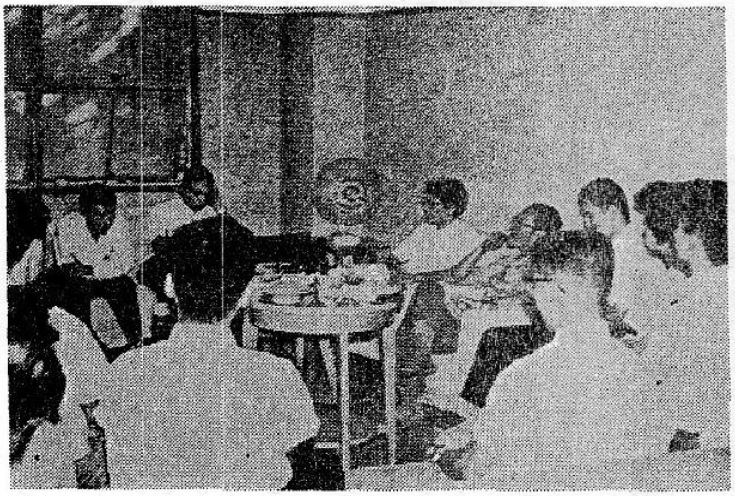
そこで新聞部では〃波乱に満ちた10年の歩み〃と題して、各先輩・先生に出席していただき座談会を開いた。その結果として、ただ10年経ったからというだけではなしに、過去の歴史の中に現われてくるあらゆる事件を取り上げて、過去をかえりみると同時に、現在の在校生あるいは後輩諸君には、より良い学校を築くため大いに努力をして欲しいとのことであった。

生徒各人に反省と努力を

家族的な雰囲気

富永　まず鴻池新田時代の話から。一期生不在のため、長瀬先生に当時の先生方の状況をうかがいたいのですが……

長瀬　当時の先生方といっても大半はおやめになりましたが、数学の沢田先生、社会の原先生、英語の橘先生、体育は私と吉田先生、物理は坂本先生、生物は富永先生と、それから、事務では森下先生、岩尾先生、岡本先生、そして校務員は山本さん、保健では泉先生、以上の方々が構成メンバーでした。そして校長室と職員室が一緒になっていて事務室と保健室と校務員室が一つの教室に同居していました。職員会議などは毎日のようで和気あいあいとしており、いろんな点において人数の少ないということが影響して非常に親密感を与えていました。



富永　昭和二十九年初め頃、校舎の敷地が現在地に決まり、我々職員、生徒は高殿小学校に間借り授業をすることになり、その頃に左近先生がお見えになりました。そこで、二期生不在につき左近先生に高殿小学校時代の話をしていただきます。

左近　あの頃より今もおいでになる先生には、数学の松村先生稲木先生、社会の林先生、英語の大前先生と国語の私です。あの時代には生徒の一部が一時的に旭陽中学校の校舎も借りていました。教務室が高殿小学校にあり、いつも一年生の先生方は道路を渡って授業においでになるというようなことでした。私がこの学校に就任が決まった時は〃大阪府立第四十八高等学校〃ということでした。二期生はまだ数が少ないので先生との親密感が深まり、喜びも悲しみも共に味わったわけです。

富永　二十八年頃から校舎の建設が進み、二十八年九月に南館が完成しました。その時の生徒の気持が一番嬉しかったのではないだろうかと思います。一、二年が過ぎそして第三期に入ります。この年は非常に元気な生徒が入って来ていろいろ若さのあふれることがあり、体育祭のユーモアパレードがこの時より始まります。これも校長の反対を押し切って実行しました。やがてファイヤーストームの計画も起ったのですが、相当問題を起こし中止になりました。

では四期以後は鶴岡君におねがいします。

鶴岡　僕達が入学した時はもうすでに本館ができていました。先生方も非常に若く、ほとんどが独身でした。それから三期生の方にいろいろなことを感化もされましたし、協力もしました。だいたい私達が入学した頃は、まだ新しい学校であって、若さがぼつぼつ目ばえきつつあるといった状態でした。

男女同行取り止め

富永　三期生の九州方面への修学旅行で少し問題が起り、次から男女同行を取りやめになっ

たのですが……。

後藤　男女共学として入学したのに、旅行は一日遅れて女子の後について一周したんですが同じ教室で同じように勉強していましたから、一緒に行けたら良かったと思いました。

鶴岡　修学旅行委員をやっていたのでだいたいのことは聞いていたのですが、旅行そのものに対する計画とかそういったものに対する根本的な参加というものは私達も充分にやれたと思います。

富永　少し時期がずれますが、九期生の前川君が先般修学旅行に行かれたので、男女同行の旅行が良かったかどうか聞いてみます。

前川　男女同行の旅行しか経験がありませんので、僕は比較することはできませんが、やはり男女同行で行ってよかったと思っています。

富永　赤沢さん、女子の方は一緒に行かなければ反対だという声がでていましたか。

赤沢　イイエ！そんなことはありませんでした。

富永　〝男女が一緒に行かなければ意味がない〟という声が出たのは三、四期でした。では次に三、四期の当時のクラブ活動の話をしていただくことにします。

厳しかった運動クラブ

臼井　僕は運動部だったので、運動のことになりますが、まず第一にクラブ数が少ないことは寂しかったです。しかしクラブの練習時間は、今に比べてずっと多かったですね。

富永　では次に五期の河村君に体育大会の状況と体育大会の後実行したいろんなことについて……。

河村　体育大会があれば、自分の出場種目が終るとすぐ帰るほうでしたので、申しわけないが興味がなかった。（笑い）

富永　体育大会が終ると、今は割合にすっとみんな帰るように習慣づけられていますが、鶴岡君らのグループは北館の屋上で暴れていたんではないんですか？

鶴岡　そういうこともありました。（笑い）

長瀬　あの北館の一番大きい合併教室に集まって先生をつるし上げようといって、校長に談判しに行ったようですが、談判した後、満足しましたか？

鶴岡　とにかく、勉強々々でしたので、久しぶりに解放されて〝これは面白いなあ〟と思いました。しかし陰険な空気でしたね。

富永　三、四、五期あたりは、先生がこわかったので生徒が何でも自発的にようしなかったというような状況はなかったでしょうか。それ以後、長髪が許されるようになったんですが……。

長髪制しかれる

後藤　あの頃、二期生に歴史的な人がおられて、その人達が先頭に立って、長髪問題を指示しておられました。僕はそんなに伸ばしたいとは思っていなかったですが、教師なり学校の方針がきつく、締められれば締められるほど反抗的に伸ばしたいという気持になったと思います。

富永　長髪以外で何かおさえつけられているような気持はなかったでしょうか。

左近　あの頃は僕達としてはおさえるつもりはなかったのですが、学校ができて間なしでしたから……。

結局生徒にうまくうち溶けられなかったということですね。

富永　生徒会は学校の方針と関係しますので、寺田さんあたりが役員をした時代と三、四、五期との比較があると思いますが。

寺田　私たちの頃は生徒会から働きかけなければ、みんなが動いてくれないといった傾向がありました。フォークダンスなども昔の話を聞くと生徒の方から進んでフォークダンスをしようというふんい気だったと聞いて、恥ずかしいと思いました。

富永　さて話がそれましたので、六期生の時代にもどります。この時代は国公立の大学入学が百名という大学入試では本校の黄金時代というようないい成績を納めた実績があるわけです。そのほか、六期時代は歴史的なことがいろいろあったんですが……

岸　今、六期で一番感じることは横のつながりが、しっくり行っていたということです。

豊田　この学校には男らしさがなかったように思われます。それはサッカー、ラグビーのような男らしさのあるクラブがなかったからだと思います。

富永　大野君、六期生の教室での生徒の態度はどうでしたか？

大野　勉強をやる人はしっかりやってましたし、普段勉強しない人でもやる時にはしっかりやっていました。将来、自分の進むべき道をちゃんと考えていたのでしょうね。特に僕が印象に残っているのは、体育大会の棒倒しで握手して別れようじゃないかと相談があって実際には棒倒しをやらな

第6回
体育大会の時、ユーモアパレードに参加する愉快な生徒達

かったこと、閉会式での万才（三唱で、三年生の人達だけが）万才をしなかったということです。

富永　どういう目的でしたか？

大野　学校に対して反感を持っていたんじゃないでしょうか、それにあの勤評問題や長髪問題がありました。

富永　あの時には担任をロボットのようにしてしまって、一切担任に相談せずに実行するというようなふんい気でしたね。その頃食堂ができたんではないんですか。

豊田　もうできていました。

富永　食堂ができた時の感想はどうでしたか。

岸　始めは弁当をもって来なくてもよかったので、ものめずらしかったけれど、時が経つにつれて、やはり弁当の方が不自然でないような気がして来ました。

富永　四、五、六期そして、七、八、九期の比較を辻村先生にお聞きします。

辻村　昔のことはよく見えるものですが、今と比べて当時は楽しかったですね。五期生は四期、六期と違って非常におとなしかった。前の四期生が卒業記念樹のことでもめ、六期もまたアルバム作りでもめましたけれど、その間の五期生はまず何事もなくうまくいきました。

六、七期はあまりよく知らないんですが、最近、あんがい生徒総会などで反抗的な話題というものがなくなってしまいました。もめることはよくないとしても、進んで改革してやろうというような自主性がなくなったのじゃないかと思います。

富永　七期になるんですが、丁度この頃から勤評問題が大きくなり、玄関といい、校長室といい、赤旗がひらめいていて先生方の大闘争が行なわれましたが、生徒諸君のその時の気持はどうでしたか？

石川　僕としては、マスコミを通じてしか知らなかったので、大した事ではなかったと思っていましたが、校門に赤旗がひらめいているのは、我々が学校で勉強しようとしていた気持をくじく役目を果していたようでしたし、組合と校長さんとの対立がやっぱりイヤな気分でした。

富永　勤評問題で商業新聞に出たため七期生の就職にも影響するんではないかという声はどうでしたか。

石川　やはりそんな声もあったんではないでしょうか。それに生徒側より父兄の人々に声が多かったんではないかと思います。

富永　在学中の校長に対する感想はどうでしょうか。

石川　私個人としては何かしら、とっつきにくい感じでした。

富永　赤沢さん創立十周年になっての感想は？

赤沢　他の学校は伝統的な威厳を持っていますが、本校は新らしくてそれがありませんね。また新しいために先生方の争いが私達の面前で表われることもあります。でも、これから次第に大阪第三地区での伝統が育ってゆくのだと思うと、大変意義のあることだと感じております。

富永　六期生の長髪問題以降になると、それまで非常にきびしく教育されてきたのが、急にゆるめられたような感じがあって、生活指導面で三、四、五、六期生時代と違ってだらしなくなったとお互いに感じていると思うんですが。

前川　服装の面では特に夏服に更衣すると、校章その他で乱れるし、またスリッパは生徒の要望で決められたにもかかわらず守られていない、それに食堂には土足のままで入ったりしているといった状態です。

富永　私がこの十周年の歩みを見た場合、次のように感じます。一期から六期までは、少し生徒にとってはきびしかったようでしたが、やがて六期を境にして生徒の自由が認められてくると、その頃から生徒の乱れが目立って来た。また、八、九、十、十一期生にわたってはだんだんとクラブ活動、生徒会が活発になってきた。そして悪いことは生徒同士が戒めあっていく。だからもう四、五年もすれば完全に理想

サービス満点……
各種ガラスの御用命は
株式会社　三谷ガラス店
（旭区役所北へ50m）　TEL 951—2480・2710 / 952—2931～2

的な学園が出来上がるのではないかと思います。

次に愉快な話等をお互いに出していただいて後のしまりをつけたいと思います。

女性的な旭高生

河村　友達とよく話すのですが、旭の生徒は女性的だとか自主性がないとかいわれていました。話が変りますが、今職員室が分散しているのはどういう理由からですか。

富永　あれは結局先生が自分達で勉強したいということ、すなわちセミカレッジ的な表現です。なお必要な生活指導、あるいはクラブ活動その他の相談については別の打合せ会を持ち、掲示板もきっちり記入するようにしているわけです。担任の先生は会議室で一緒に食事をするようにしています。

河村　僕が思っていたのは、その分散した背景としては、先生が派閥にわかれていますね。それが原因で、あのように分散して意気の合う先生同志が集まっていると、僕らはみていたのです。

富永　それは違うんです。現状はどうかというと非常にうまくいっています。先生同志の研究心が旺盛になっています。そしてしっかり勉強して生徒の前で発表をするというのが先生の本分であり、また義務でもありますからこれに反対する先生はどなたもおりませんでした。

過去からずっと一番こわかった先生はどなたでした？

寺田　なかったように思います。

富永　長瀬先生あたりはどうでしたか。

寺田　長瀬先生には特に協力してもらったから、こわくありませんでした。

左近　年をとるとだんだん生徒は寄ってこなくなりますね。僕がはじめて来た頃は、僕が行くとみんな寄ってくるのでしたが、この頃の人達は僕の顔を見たら逃げるんです。おかしいと思いますね。僕なんか一番こわくないんですがね！（笑い）

富永　そして奥さんをもらいますと、女の子が逃げて行きます。これははっきりしていますね。独身時代はちゃらちゃら寄って来ましたけれどね。（笑い）

長瀬　先程、河村君のように卒業生が職員室の分散について、いろんな目でみていると思いますが、これはこれからの道を歩む旭高校としては非常に大事なことだと思います。結局高校の生徒というものは、もう育てる段階ではないと思います。だから生徒の自主性を認めあって、先生も生徒もお互いの本分を認めあってその人なりに精進をするのが根本的な問題だと思います。

魅力に欠ける職員一同

富永　その点、一期生、二期生あたりでは、先生と生徒とがたいへん親しく、家族的でしたね。今の話から出る結末はもう少し先生と生徒の親密さを増して、ぴしゃりといったところがどこにあるか見つけるのが今後の課題だと思います。

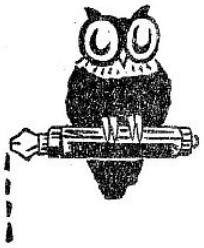
大野　密接にいかんという理由なんですが、うちの学校の先生には魅力がないように思えますね。（笑い）僕なんかよく学校へ来る方なんですが、どの先生に会いに来るかという気が全然おこらんですね。

岸　私もよく在学中はそのようなことを考えましたよ。どうも本当のところなんていっていいのかわからないが、親密感がないというのか……。

富永　だから魅力のないというのをおし進めていくと、在学中に魅力のないつき合いをしたということでしょうね。

いろいろ話をしてもらいましたが、この十周年がどうあるべきかと考えてみると、単に十年たったからというだけでなしに、世間のいうお祭さわぎをするのではなく、過去の歴史の中に現われてくるあらゆる事件を取り上げて、過去をかえりみると同時に、現在の在校生あるいは後輩諸君によりよい学校を築くための反省と努力という意味で、これを全職員、在校生にも徹底していただくようにお願いするのが今回行事の本当の意味であると思います。

これをもって十周年記念に際し座談会を終ります。



出席者

富永公一	先生	
長瀬静子	先生	
左近弘治	先生	
辻村明郎	先生	
臼井弘	（4期生）	
後藤昌和	（4 〃）	
鶴岡優二	（4 〃）	
大野幸征	（6 〃）	
川村守生	（6 〃）	
岸恵吾	（6 〃）	
豊田紀勝	（6 〃）	
石川稔	（7 〃）	
寺田厚子	（8 〃）	
赤沢勝子	（9 〃）	
前川良平	（9 〃）	

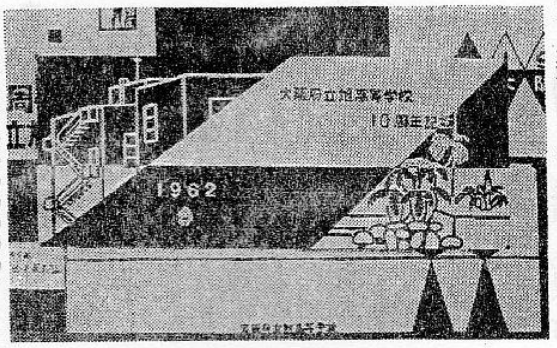
祝　あらゆる種類の文具品は
旭高校内　購売部
……いたつて安値よ……

手拭い図案

二年三組　国分君入賞

本校も今年で満十周年を迎えることになった。学校側ではその記念として全校生徒に記念品の手拭いを送ることになり、そこでその図案を一般生徒から募集をした。応募多数の中から厳重な審査の結果、二年三組の国分広昭君が入賞した。（以下国分君の話）

学校が十周年を迎えた喜びをぼくなりにどうかしてあらわしたいと思って応募した。美術の本や古本屋のデザイン関係の本をあれこれ物色して研究した。そして四、五枚の構図を考えた後一番良さそうなのを選んだ。図は本校の向上を表わした斜め帯を中心に、北館の非常階段と玄関のソテツの植え込みを配した。色彩は手拭いにふさわしくブルーを用いた。僕のデザインした手拭いが入選したことは、非常にうれしい。



こぼればなし

。八年前の忘れ物――それは玄関と消却場のランとシュロの二本の植物。立派に成長いたしました。この種の忘れ物おおいに歓迎。

。平安の都をしのばせるはかない物語。それは一男生徒の失恋でありました。その男生徒は或る日自分の靴箱にカンナの花を発見しました。彼女の好意と思いしや、絶交のしるしであったとは（ああプライドよ）

。六期生は奮いました。「長髪にしても髪を清潔にします。帽子もかぶります。」てな事言われてその気になって許可して見れば、在校生は言いました。「俺はそんな事約束した覚えはない……」と、泣けるねこの話。

。或る男性は冷酷でした。クラブ予算の席上女生徒の必死の演説にもかかわらず言いました。「化学室のバーナーで茶をたてろ」

「琴の糸をしめるのは男子にやらせろ」

現在の在校生の男子諸君はどうでしょうか。

師を訪ねて

一流のレベルに

坂本先生の巻

実力テストもさしせまった八日の午後、ほたるが池の先生のお宅を訪問した。先生は道順がわかりにくいだろうとおっしゃってわざわざ岡町駅まで自家用車でむかえに来て下さった。ここにその時の一問一答をかかげてみた。

問「先生は十年間勤続でいらっしゃるそうですが、創立十周年にあたってのご感想は……。」

答「あっという間の十年だった。まあ悲喜こもごもとでもいっておきましょうか。」

問「では十年間を通してつらかったことはありませんか。」

答「学校が始まった当時は他校の教室を借りて授業をやっていたのでなにかと不自由だった。」

問「うれしかったことがありましたら……」

答「女子ソフトボールクラブが結成された年の一学期に第一試合で四条畷高校に勝ったことですねあの時は本当にうれしかったね」

問「それでは先生が教職を選ばれた動機は」

答「一つは義兄と出身校（東京文理大）が同じだったこと。それからもう一つはどうも私は商売のかけひきが苦手でね。教職が一番性に合っているのではないかと思っています。」

問「専門教科は何でしょうか」

答「物理です。」

問「授業をやっておられてどう感じられますか。」

答「授業中はたのしいですね。他のことはみんな忘れてしまえますから、話を聞いていない人や、ねむそうな人はすぐわかりますよ。」

問「何かご研究をなさっていらっしゃいますか。」

答「数年前にたまむし織を研究しましたが、途中まで理論づけて中止してしまいました。」

問「何かご趣味をおもちですか。」

答「運動することですね、一通りはかじっています。しいていえば卓球にテニスってとこですかな。」

問「休日はどんなふうにすごされますか。」

答「家族と一緒にドライブに出かけます。三月に免許をとりました。やはりダンプはこわいですがそれ以上に飛び出してくる自転車がこわいですね。このごろはどこでも駐車場に困ります。その他趣味と実用を兼ねて色々な物を作ります」

問「では先生からご覧になった旭の生徒はどんなものでしょうか。」

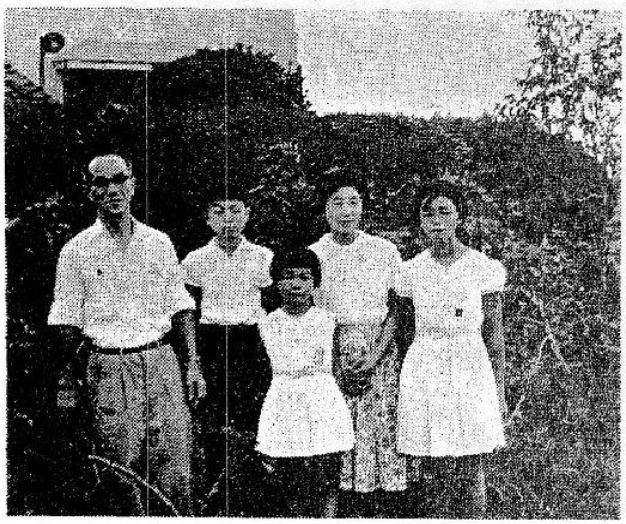
答「わりにまじめでおとなしいですね。お世辞じゃありませんよ。」

問「生徒に対してのご希望などございましたら。」

答「無帽で登下校が多いですね帽子はかぶるものですから持って歩かずに、かぶって歩くように、それからもっと勉強してほしい」

問「では最後にこれからの抱負などお聞きしたいのですが。」

答「なんといっても旭を一流のレベルに持っていきたいと思います。」



（坂本先生とご家族）

恩師にあてる

左近弘治

かわらぬお忙しさのことと存じます。

八月末にやっと寸暇をつくって広島に赴きましたとき、先生からお受けしましたご教示の数々を、帰阪の後もつねに気にかけてはおりますものの、一向に文章にはなりませんで、けっきょくむだに過ごしてしまった日を悔いております。記録することがどんなに大事であるかということは、大学在学中の先生の講義を通して体得したはずでおりましたのに、いざとなればやっぱりだめであった自分がいまさら恥ずかしうございます。

日ごろの現場の忙しさについ埋没してしまって、ために国語教師としてどう歩んだかを語る記録の一ページもなきを、わたくしが告白しますと、先生はいつもきまってあたたかく慰め勇気づけてくださいました。それは先生ご自身の実に厳しい生活をあれこれ存じあげていますわたくしに、激しく情熱の炎を燃えたたせたことでございました。

教職十年の過去を顧みて、自己の国語教育者としての実践をあとづけ把握しておくことが、とりもなおさず現実のわたくしの国語教室を充実させることになり、ひいては未来のわたくしの国語教師像を鮮やかにえがくことになる、十年という区切りのいまそれをなさなければ、今後その立ちおくれをとりもどすことはあまりにもむずかしい、と先生はおっしゃいました。十年前わたくしがまだ学生であったときと、一蔵書がひときわ多くなったために、そのすき間に座ることがいっそう窮屈に感じられたほかは一少しも変っていないあの部屋で、先生は実につぶさにいろいろとお教えくださいました。わたくしは帰りの車中でも、ずっと先生のおことばを、お聞きしたお声のまま耳にひびかせながら、この度の広島行きの意義深かったことを思いました。そして、先生のもとに学んだ大学生活にいまさらのように喜悦を感じ、誇りを抱きました。

ところが、あれからすでに二十日、思いが文字に定着しないおのれの怠慢はわれながら腹立たしく、先生が態度もあらわにご叱責くださるほうが、むしろ、わたくしのような人間にとっては、ためになるのではないかなぞと手前勝手な考えが頭をかすめたりするのでございます。とにかく思いきってお手紙をさしあげることによってみずからいいきかせたいとの所存でございます。

ちょうど去年のいまごろ、[註1]わたくしは教師になって五〇〇〇時間の授業をいたしました。最初のころの教え子や、最近の卒業生たちがそれをききつけて集って、ほんのうちわのお祝いと激励の会を催してくれたことがございました。その席上では、わたくし自身が聞いてもずいぶん懐しい国語の授業の印象をいろいろと話してくれましたが、たまたまその会に出ていた今の生徒が、[註2]このごろの教壇のわたくしには、そうした面影がないという旨を話したことがあります。わたくしへの善意があふれていたその催しの空気を心から嬉しく思ったとともに、そのとき、わたくしはどんなに淋しさを人しれず感じたことでございましたでしょう。それは、情ないとか恥ずかしいとかいう気持ではなくて、知らぬまに失ってしまった若さへの未練がましさであり、淋しさでございました。

わたくしが大学を卒業し本校に就職した年の秋のことでした。まだ学校が創立二年めでありましたので、その春大学を卒業したばかりの若い教師がおおぜい一度に赴任していたわけですが、その者たちで、いろいろとだべって、日ごろの鬱憤をはらそうではないかということがございました。すき鍋でじゅうぶん腹をふくらませたいきのよい教師が、ご招待するという体でお迎えした[註3]校長さんを相手に、みんなそれぞれずいぶんいたい放題を言ったものでした。わたくしも、そんな場で興奮のあまり、わたくしの教師像を口ばしったことを覚えています。線香花火のように一瞬はなばなしく焔を発し、やがて消えつくしてもよいといったような生き方には疑問を抱くし、またわたくしにはとてもできない。むしろ、ろうそくのように細々とであってもよい、長く尽きず燃えつづけたいと自分の教師としての生き方をそのころからはっきりもっていました。

わたくしが教師になろうと意を決したことが、はっきり申しまして、お世話になった先生方、わけても小学校でのF先生、[註4]中学校でのF先生へのご恩にお報いしたいという気持に大きな因があったことでございましたし、教え子とのつながりを深め、教師として自己を高めるためには、ぜひとも、永久に燃えつづけることが大事であると信じたからでございました。

教師の生命ともいうべき教壇のわたくしが昔と変ったとしますとそれが、わたくしにとりまして衝撃でなくて、なんでありましょうか。きょう、わたくしは五五八〇時間めの授業を終えました。この日に日に重なる数字が悔いのない実践の集積となりますように教師生活をただしたいと存じます。そしてそれがいずれ記録の形で先生にご報告申しあげることをお誓いいたしたいと存じます。先生、きょうはわたくしの誕生日でもございました。

お忙しささこそと存じますが、わたくしのためにも、おからだをお大事になさってください。

九月十五日

註1　昭和36年9月29日
註2　当時一年生
註3　綾仁前校長
註4　旧制中学校

若人の生命

教諭　大野順三

。十年の年うつりゆく学び舎につどふ若人面（おもて）明るし
。秋の空碧くさやけくゆたかなる自然をめでてよろこびの校歌（うた）
。世のうつりけはしくはげししかはあれど　誠に生きて幸多き子ら
。生駒嶺の四季にうつろふ山なみを　めづる若人生命和めり
。新らた世に知性を磨く若人は苦悩をこえて生命明るし
。新しき文化きづくと若人の思念は凝りて生命ゆたけし

書籍・月刊紙・参考書
あらゆる自習書は
中路書店
省線玉造駅下車日ノ出通商店街
TEL七六二—一一八一

随想

―これからの旭―

辻村明郎

一方では「新聞」に投書を寄せておりまして、他方では今年から新聞クラブに入門して勉強することとなりました。

旭にとって最も重大な事件が起りましたのは、あの五期生の卒業時からでした。この動評問題は教育の場が政治によって汚がされた不幸なできごとでしたが、当時の朝日新聞から私の一文を引用させていただきますと、「テレビニュースのライトを浴びて、入学式が行なわれた。学校長と大阪府高教組とが対立している異常なふんいきのなかで、一応正常な入学式ができたことは、新入生諸君のためによろこばしいことだった。入学式がだんだん近づくにつれて、もしも入学式が延期されるようなことにでもなったら……と私は気が気でなかった。晴れの入学式に希望で胸をはずませてやってきても門前払いをくわせられるのでは、若い心がいかに傷つくことだろう。これを思えば何とか入学式を行なわねば良心が許さない。また一方、いろいろな事情で職員会議が開かれない。でも私たちはただ傍観していていいのだろうか。組合員、非組合員の区別なく、責任を感じて集った有志が相談の結果クラス編成、名簿作成などをやりとげ、結局、学校側も当日の朝、これを認めた。私もクラス世話係としてはればれとその任を果した次第である。」

このあと旭が民主化の方向へと動きはじめたのにつれて、私の教育に対する考え方も次第に育ってまいりました。その一端を伝えるものとして今年春の「朝日」では「教育というものは、生徒のために民主的で、円満な人格養成をめざして行なわれる。」とまず基本目標を示し、次に「校長には管理職手当が支給されてその権限が強化され、教育委員会は公選制から任命制にきりかえられて、ますます権力的となった。今年も文部省は中学校の一斉学力調査を実施しようとしているが、これは教育の国家統制的な色あいが濃く、テストによい点をとるための、ゆがんだ教育を助長する。それに、わが国の教育の諸条件は、このテストの結果をまつまでもなく、世界水準より決して高くないと思う。」と教育を権力で統制しようとする動きを批判し、教育は自由で、自主的に行なわれるべきであると強調しました。

さて私たちの旭は今後どの方向へ向かうべきでしょうか。教育方針は？ときかれても、いまのところ受験指導なんでしょうと答えるほかありません。では教育方針は誰が立てるのでしょうか？――いうまでもなくみんなで立てるのです。大学入試のためにゆがめられた高校教育、私たちはいつまでもこれでよいのでしょうか。十周年のいまこそ私たちは高校教育本来の姿にもどすべきだと考えます。

各教科にわかれてからは、みなさんのためにいままでよりずっと深い研修が進められてきました。クラブ活動などみなさんの自主的な活動はますます重視されるでしょう。高校生活三年の間、みなさんが民主的な人格養成に励み、自主的で創造力ゆたかな活動を行なって、教育の高い理想に向かって一路進んで行くようにと心から望んでいます。

編集後記

本校も創立以来、早や十周年を迎える齢に成りました。われ等愛する新聞部も他校の例に習うわけではありませんが、この祝福すべき年に本校の十年間をふり返えってみるため、又、この十周年目を境いとして、ますます本校の発展を望むために、ここに〝創立十周年記念特集号〟を発刊いたしますことに相成りました。

本号は夏期休暇に入ってから、学校より依頼があったものの、われ等新聞部でも企画は進んでいた次第であります。それゆえ、夏期休暇を返上して編集会議に編集会議を重ねて計画した結果がこの各頁に載っている〝本校十周年史〟〝十周年をふりかえって＝座談会＝〟〝恩師よりの回想〟などがそうであります。

最初これ等全内容全てで十六頁と見積って計算しましたが、とても十六頁には載り切らないことが最終的にわかってきましたので、「頁数を増すか」「内容記事を削るか」と大いに論争した結果「内容はこれ以上削ることはできない」との結論を導き出して頁数を増すことにおちつきました。

何分、予算額（新聞部）を完全にオーバーするので一部学校負担という形で編集することに成りました。その為に一部の先生方には大変御迷惑がかかりましたことをこの紙上をもちまして、おわびいたします次第であります。

なお本号は〝旭高校新聞・第二十五号〟を兼ねております。

新聞部部長・梶原和彦

旭謄写堂
活版印刷、謄写印刷の御用命に
旭謄写堂
TEL 九五一―六六五〇
旭謄写堂
旭謄写堂
旭謄写堂

新聞・雑誌・欧文
和文カタログ　印刷
宏栄印刷株式会社
大阪市旭区新森小路中二ノ九四
電話　大阪　九五一―一二三一（代表）

クラブ十年の歩み

文化部

図書クラブ

全クラブの先陣を切って？創立図書全般よりむしろ文学方面で研究をしてきた。読書会を開き、図書館報を編集し、その他古典名著を読破している。今後も部員相互のみならず、生徒全般の読書欲向上につとめたく思う。

数学クラブ

本校創立とともに発足。対外試合や展示会をしないから不活発に見えるが、内部では地道に活躍している。市立高校数学部の見学も行なった。火曜日はパズル的なもの、金曜日は一年が補習、二年がこれまでの復習をしていて、決してかたぐるしくはない。

物理クラブ

二十八年発足、電波班はテレビにも出演、天文班は先輩苦心の作、反射望遠鏡で月面撮影に成功、気象班は大阪市内の気象変化を調査して表彰された。地質班は創設後まだ日が浅く地質図作成をめざしている。

新聞クラブ

旭高校唯一の報道機関としての新聞クラブの活動は、地味なものでまだまだ自慢できるものではない。昭和三十年に第一号を発行し今回発刊する十周年記念号で二十五号となる。二十号から一時禁止されていた広告掲載が学校側のご理解により許され、予算の少ないのをカバーするため部員一同商魂たくましく活動している。広く生徒達から愛され親しまれるような魅力のある新聞を作ろうと、今日もまたこの創立記念号を発行するのに暗くなるのを忘れて全員がんばっている。

生物クラブ

本校創立と同時に生物クラブは発足しその時代は設備が不充分でその上特別教室がなかったので活動も充分とはいえなかったが、十年目を迎えた今日では女子の宿泊も許され加太の磯採集へと出かけた。自然に近づき自然を愛しその中で生物クラブとしての活動を広げている。

化学クラブ

昭和二十九年に発足し、当時は部員も十数名で予算の制限等もあり充分な活動もできなかったが、今では部員も四十名近くおり、不充分な費用ではあるが、実験を行ない、またその結果に対して常に考察を加えると共に、科学的な態度、能力を養っている。

生活科学クラブ

創立以来十年目を迎えた生活科学クラブ。自分で創るよろこびがこめられ、愛着の念の深いクラブである。はじめは染色と料理を手がけてきたが、今日では染色一本技術の面でも大いに進歩し、研究を重ねて立派な作品を創るよう心がけている。

英語クラブ発展段階

一、漠然と活動。
二、会話用レコード、テープレコーダーの活用。他校との交歓会。
三、校内英語暗誦大会。外人教師外人学生の来校。
四、全関西高校英語弁論大会、暗誦大会への出場、英語劇の発表、クラブ誌の発行、外人訪問、映画上映。

演劇クラブ　公演記録

第一回（二八年八月階段教室）
「夏の夜ばなし」作、榊原政常
第二回（三〇年二月社会科教室）
「水泥棒」作、真船豊
第三回（三一年三月社会科教室）
「広島の女」作、長谷川行男
第四回（三二年二月社会科教室）
「女たち」作、蜂谷緑
第五回（三三年二月社会科教室）
「肖像」作、岩津洋一郎
第六回（三四年二月体育館）
「国境の夜」作、秋田雨雀
第七回（三五年二月体育館）
「春雷」作、林黒土
第八回（三六年二月体育館）
「外向性一六八」作、榊原政幸
第九回（三六年一一月体育館）
「おふくろ」作、田中千末男

写真クラブ

創設当時は焼付け、引伸しで精一ぱい、作品どころではなかったが、撮影会や講習会で練習を重ね現在学期ごとに写真展を開いている。フイルム現像にも熟達し、体育祭には即日報道写真を発表、文化祭にも活躍し、作品の向上をめざして大いに腕をみがいている。

書道クラブ

昭和三十一年創部。地味なクラブではあるが古い伝統を誇っているクラブである。部室はクラブ専用ではなく、これまで洗濯教室、書道教室（今の一年五組の教室）社会科教室などで練習してきた。昭和三十二、三年に全国学生書道展において特選、金賞、銀賞など全員りっぱな成績をおさめた。

珠算クラブ

昭和二十九年に文化部の一クラブとして活動を開始し、珠算能力向上を主旨として今に至るまで検定試験に多数の合格者を出している。女子の就職希望者の多い本校においては、重要な役割を果している。

茶華道クラブ

人がうっかり見逃しそうな野辺の雑草や草木の中に自然の美を発見し、これをありのままの姿で最も美しく表現していこうというのが華道の精神であり、また女性の上品さを作り上げる最も近道は、やはり茶道を始めることです。この精神をモットーに昭和三十年に発足しました。茶道は表千家、華道は嵯峨流でいずれも山内芳甫先生にご指導いただいております。

放送クラブ

本校十年の歩みは放送クラブの歩みといっても過言ではない。体育祭、文化祭その他の行事から日々の放送にいたるまで学校の発展に貢献してきた放送部。部員一同この仕事に大きな責任と誇りを感じている。

箏曲クラブ

有閑人の貴族的悪趣味とみなされ難航の末、昭和三十一年に創部された。はじめは先生中心の演奏会であったが、やがて生徒中心の演奏会へと発展、清水谷高校との交歓会も行なった。

歴史クラブ

三十一年四月にうぶ声をあげ、翌年部誌「しきれ」を発刊、第四号にいたる。創設当時校外では展示会、寺院の見学及び歴史映画観賞にのみ制限された。昨年の文化祭には「古墳展」を開く。今年から方針を改め、考古学班、寺院研究班、時代の流れ研究班、近代史班の四班を設けた。

美術クラブ

三十年五月創部、翌年の第十六回美術文化展には二作品入選。三十四年に部誌「アリアス」創刊、秋にはスケッチ会、グループ展、「旭展」個展とすばらしい活躍が見られた。卒業生と在校生とで「クレオール展」を開く。美術クラブの発展は先輩、顧問先生のおかげである。

弁論クラブ

昭和三十三年同好会として発足し、翌年クラブ昇格。同年五月、全国優勝弁論大会参加。旭区の「社会を明かるくする弁論大会」

では中学生に模範弁論を示した。三十五年、汎愛高校弁論部主催の大会に出場、惜しくも入賞できなかった。

地理クラブ

今から四年前同好会で発足、六甲山塊の花崗岩風化の観察をした。地質と地形との関係、地形と侵蝕との関係などのテーマで数回山ふところに入りこみ熱心に活動を続けた。翌年その実績が認められてクラブに昇格。文化クラブの中では最年少だが、これからの活躍を見てもらいたい。

体育部

野球クラブ

本校創立十周年を迎えて、野球クラブは六才になった。凸凹のグランド、お粗末なネット、少ない部員という悪条件の中で立ち上がった野球クラブは闘志と努力で練習にはげみ、昨年夏の大会予選では三回戦まで進んだ。今や恵まれた設備、熱心な先輩の指導の下に野球クラブはすくすく成長を続けている。

ソフトボールクラブ

昭和二十八年の誕生、三十一、二年頃は部員十二、三名で投手力は充実、近校では圧倒的な強さであった。三十三年から三十六年にかけては部員十五、六名ではあったが、全試合の勝率は三割から四割にとどまった。

卓球クラブ

渡り廊下で練習を始めたのが二十九年、場所的に最も悪い条件でありながら県命な練習を重ね、年ごとに腕をあげてきた。部員は四十人近く、国体予選で好成績をあげている。十周年に当って部員の最大の希望は専用コート新設である。

バレークラブ

学校創立と同時に男子バレー部が誕生し、その翌年には女子バレー部が作られた。やがて新一年生に多数のメンバーを迎え対外試合および公式戦に参加、昭和三十三年に国体予選出場権を得たのをはじめ、三十五年にははじめて近畿大会に出場することができた。また三十六年の指導講習会では準優勝、国体予選には三回戦まで進んだ。

陸上競技クラブの記録

（n）はn期生

男子			
100米	10″9	藤井(9)	37.8.5 IH第5位(大分)
400米	53″8	鎌田(8)	36.9.9 (服部)
800米	2′03″1	赤峰(7)	35.8.6 (王寺)
800米継	1′33″1	(木村(10) 東(10) 浅利(10) 藤井(9))	37.6.21 (明石)
走巾跳	6.60m	藤井(9)	37.5.13 (大阪城)
走高跳	1.75m	川元(7)	36.6.11 (中モズ)
円盤投	36 43m	松本(7)	35.6.11 (中モズ)
三段跳	13.19m	西川(7)	35.6.11 (中モズ)
五種競技	近畿2位	2319点 福井(7)	35.9.10～11 (中モズ)
女子			
100米	13″4	山際(9)	36.11.5 (服部)
800米	2′45″3	手塚(8)	36.9.10 (服部)
400米継	55″6	(山際(9) 普久原(10) 生田(10) 黒田(9))	37.6.24 (明石)

バスケットクラブ

男子バスケット部は昭和二十九年に発足し、同三十二、三年にはあらゆる大会のベスト8に入る。同三十六年より合宿が初まり近畿大会の出場を目指して現在は部員一同練習に励んでいる。女子バスケット部は昭和二十八年に発足。同三十五年にはブロックにおいて一年生大会及び新人大会に共に二位に入った。そして同三十六年にはブロック優勝、府下第四位をとり、三十七年にはブロック準優勝をし、現在は近畿大会及び全国大会を目指して励んでいる。

テニスクラブ

昭和二十九年夏設立、同じ年の公式試合に参加男子は府のベスト8に入った。三十二年、高島・早川両君が西日本大会出場権獲得、三十三年校内第一回旭杯争奪戦、三十四年秋季大阪北部高校戦で団体女子優勝、男子四位、三十五年春女子二位等、優秀な成績を納めてきた。

柔道クラブの歩み

発足以来十年の柔道クラブは全国高校柔道連盟とおない年。

二七年、部員六名、城東工業仮設道場で初練習。

二八年、高殿小校庭で練習。

二九年、高殿小美術準備室に道場仮設。

三〇年、部員二十名、本校美術準備室と屋上に道場仮設。

三四年、柔道場完成。

三六年、府下大会で十六位内に入る。

ダンスクラブ

本校創立以来、体育大会、フォークダンスの集いなどで活躍。三十五年度には創作舞踊「直線のリズム」「レナ」「太胡船」発表、昨年第一回文化祭には生徒による創作舞踊「雪の降る街」を発表、大阪府高等学校生徒による創作舞踊発表会にも参加した。

器械体操クラブ

昭和三十三年創部、三十四年はじめて近畿大会に出場して跳馬で三位に入賞した。三十五年女子部誕生。三十六年には高校選手権跳馬で二位、新人大会平均台で三位という好成績をあげた。

剣道クラブ

三十二年秋、剣道同好会として発足、三十三年剣道クラブ。道場なしから出発、柔道場借用を経て現在体育館で練習している。これまでの基礎鍛錬から、技を磨く方向へ移りつつある。

サッカークラブ

昭和三十六年六月に同好会を結成ただちに練習をはじめ七月二十日市立高校との初試合では三対二で勝ち初陣を飾った。その後たゆまぬ練習の結果、好戦績を残し、正式にクラブに昇格した。

音楽クラブの歩み

昭和29年　(1954)
　音楽クラブ登場　小人数の女子部員

昭和31年　(1956)
　男子部員誕生(混声四部合唱団になる)
　NHK全国唱歌コンクール　大阪府第5位

昭和33年　(1958)
　8月　音楽室完成
　全日本学生音楽コンクール　西日本第2位

昭和34年　(1959)
　NHK主催「みんなで歌おう大会」出演
　全日本学生音楽コンクール　西日本第2位